

二〇三三年一月二〇日

福祉課の窓口に笑む福寿草
草ゆらぎそめて生まるる春の水
寒鯉の石のごとくに身じろがず
もてなしは土鍋の飯と寒卵
炬燵から小さき靴下拾い上ぐ
こたつ舟首をすくめて左見右見

みづき
みきお
満天
あひる
ひのと
智恵子

二〇三三年一月一九日

母子牛鼻よせあひて日向ぼこ
おでん鍋好物そつと夫へ寄せ
沖さして百の舳先や初霞
無人駅改札口に雪だるま
夕日背に影を纏ひぬ蜆舟

千鶴
たか子
ひのと
智恵子
みきお

二〇三三年一月一八日

点検す防災リュック阪神忌
火葬待つ間の玻璃窓の細雪
すき間なく敷かれし藁や冬田晴
綾取りは菓子折りの紐小正月

もところ
ひのと
明日香
小袖

二〇三三年一月一七日

枯野から次の枯野へ測量士
存問の一句添へある寒見舞
門灯の滲みて点る寒の雨
大寒に負けじグランドゴルフ族
白き息顔に纏はせジョギングす

ひのと
満天
むべ
はく子
素秀

蜜柑ひとつ屋根の大工へ放り上げ

ひのと

山峡の寸土に頼む冬菜畑
公園に子らの声満ち日脚伸ぶ
阪神忌生家のありし辺は更地
久々の七千歩超え日脚伸ぶ

よう子
もとこ
豊実
こすもす

二〇三三年一月一六日

大とんど峡の朝日を烟らせて
初釜の湯気を纏へる柄杓かな

うつぎ
ひのと

二〇三三年一月一五日

息止めて放つ一矢や弓始め
よき音で抜ける茶筒や卓小春
大とんど倒れる刹那大喚声
とんど灰斯く高舞ひて神迎へ
箱膳をはみ出して置く祝箸

みきお
ひのと
よう子
うつぎ
みきお

二〇三三年一月一四日

海鳴りを聞いて育ちぬ頬被
一席を占む冬帽の忘物
初電話たちまち弾む国訛り
杉美林また杉美林山眠る

ひのと
素秀
あひる
はく子

毎日句会みのる選・二〇三三年一月二三日